



近鉄奈良駅前行基像

「土木は利他行」を實踐し、民衆から菩薩さまと崇められた僧侶

行基の偉業

(668-749年)

清滝生駒道路(国道163号)は大阪・奈良・京都を結ぶ幹線道路だ。平成26年に清滝トンネル区間の4車線化工事が完了したことで、清滝峠越えがしやすくなった。清滝峠のある清滝街道が、約1300年前の奈良時代に高僧行基が築いた「行基みち」である。行基は日本の土木工事の始祖として、近畿を中心に多くの道路、橋、ため池、河川整備などを行うなど、その功績は計り知れない。行基の偉業を辿りながら、日本の土木事業を振り返る。

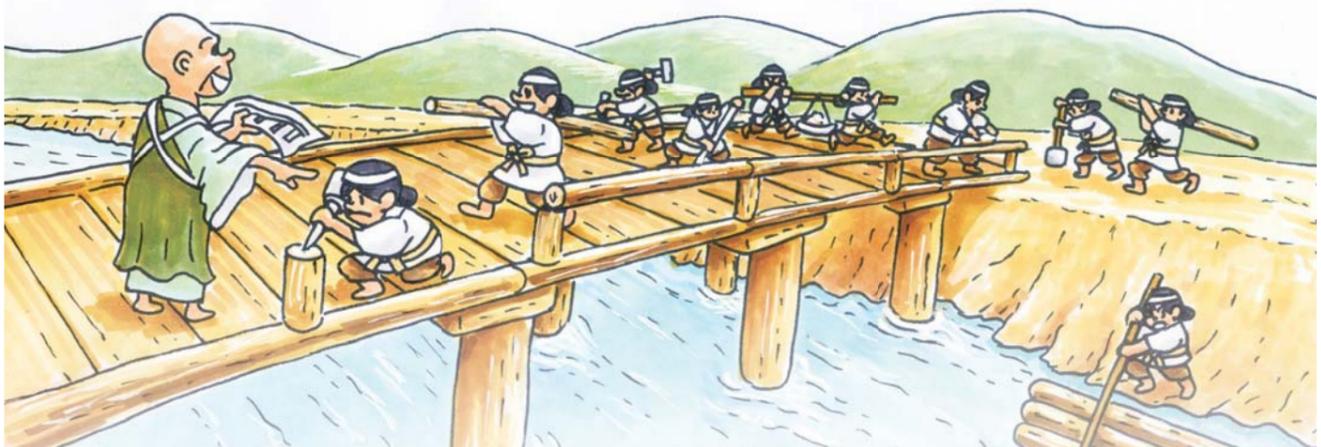


「利他行」の教えに基づく社会奉仕が土木事業のルーツ

古代から古墳や宮殿、寺社の建設等は庶民の労働力を利用して行われていた。7~8世紀、飛鳥時代に入ると、外国からの新しい知識を持った僧たちが生活に苦しむ農民や身分の低い人々を助け、暮らしやすい環境に改善する社会事業としての土木工事を行うようになった。行基もその一人で、安定した食料を得るための農業促進、生活環境の改善を図るため、先輩僧侶たちとともに街道やため池の整備、橋や堤防づくりに取り組んだ。寺で経を唱えるだけではなく、むしろ外に出て布教しつつ人を助ける社会奉仕活動(仏教

の教えで「利他行」と呼ばれる)を行うことで徳を積んだのである。

当時の背景としては、仏教の伝来以降、社会や世の中の乱れを仏教で鎮めるべく天皇や国はその布教に努めたが、律令制による重税を逃れるために修行をせず、僧や尼僧を名乗る者たちが続出。そこで朝廷は寺以外での活動を禁じ、僧侶になる条件を厳しく定めていた。このようなリスクを負いながらも、高度な土木工事さまざまな地域の人々を助けていた行基が民衆から支持されたのは、当然のことだった。



世のため人のため、最新工法で全国100カ所以上の工事を推進

僧による土木工事は646年(大化2年)、当時まだ川にまともな橋がほぼなかった頃、元興寺の僧・道登が宇治川に架けた橋がインフラ整備の始まりとされている。その後、土木工事は遣唐使のように外国文化を学ぶため派遣された学者や僧侶が日本に広めていった。新しい知識・技術もまた道登から道昭に継承され、行基はその道昭に帯同して諸国を回った。

道昭の死後、行基は僧の位を捨て、生家を私設の寺として仏の教えを説きながら、弟子や技術者集団と現在の大阪・京都・滋賀一帯で橋や道池を次々に整備。民衆からもアイデアや労力を募り、当時としては画期的な共同作業を推進した。特筆すべきは、国からの資金や人の援助を受けずに、自らの教えに応じた人力のみで地域活性の救済事業を進めたことだ。工事開始前に建てる

「院」を拠点に、食料の生産量を上げるべく池や運河、溝をつくり、物資の流通をスムーズにする道や港を整備。洪水対策の堤防を築くなど、多くの行基が行った土木事業は約30年間で全国100カ所以上とされている。粉骨砕身、民衆のために尽くし抜いたからこそ行基は菩薩様と呼ばれ、圧倒的に支持された。他にも土木工事をを行った僧はいるが、行基が手掛けた土木事業の数は群を抜いている。

行基の業績と民衆の力を無視できなくなった朝廷は、行基に奈良・東大寺の大仏造立を依頼。資金を集めた行基の成果を認め、745年(天平17年)に日本初の大僧正に任命するが、行基はその完成を見ることなく82年の生涯を閉じた。日本の土木工事の礎を築いた幾多の業績の輝きは永遠である。



行基の歌碑と行基堂がある毘陽寺。地元では「こやでら」「行基さん」と呼ばれて親しまれている。

社会資本の整備を進めた、行基の偉業を辿る

行基は橋6カ所、直道1カ所、池15カ所、溝7カ所、樋3カ所、船着き場2カ所、堀4カ所、布施屋(宿泊所)9カ所、寺院(僧院34カ所・尼院15カ所)49カ所をはじめ、多くの土木事業の実績を残している。関西圏の足跡を巡り、行基の影を追ってみた。

1 高瀬川跡地 高瀬神社

守口市馬場町

731年(天平3年)に行基が建造したといわれる橋の石柱が出土し、かつては相当大きな川だったとされる高瀬川。小公園の跡地には当時の川の様子を模したモニュメントがある。道を隔てた場所にある高瀬神社は、行基が建立して橋の管理も行っていた高瀬橋院(高瀬寺)を宮寺として機能していた。



2 堤根神社前の 行基みち

門真市宮野町

鳥居前が行基みちとなっている堤根神社。大阪府道158号から北に逸れているが、社殿の近くには、かつて行基が建造した茨田堤の一部が残り、その上に樹齢500年以上のクスノキが生えている。



3 大念寺前の 行基みち 清滝街道起点

寝屋川市堀溝

国道163号から南の堀溝のある集落に入ると、寝屋川市内に現存する最古の自然石道標(清滝街道の起点)が大念寺の門前道付近にある。交通の要衝のため、平安時代には通行料を徴収する「鶯の関」が設けられたといわれている。



4 清滝峠

四條畷市逢坂

標高245mの生駒山地を越えることになる清滝峠。峠西側からは大阪平野の夜景が望める。かつての峠は実際には少し離れた場所で、その旧道沿いには五輪塔が建てられている。道しるべの地蔵は、大和街道の逢坂越え、清滝峠越えの2つの道の合流地点にある。



古墳時代の茨田堤を整備した街道

行基みち

守口街道・清滝街道

昔の大阪府門真市近辺は、かつては湿地帯で洪水被害に見舞われていた。そこで行基は、古墳時代に建造されていた茨田堤を整備。湿地帯に土を盛り、道を造成して平城京への交通路とした。これが行基みちである。経路は守口街道・清滝街道にまたがっており、守口街道は守口宿で京街道と分岐し、国道163号と合流後、国道170号を通り過ぎると四條畷市役所付近で清滝街道へとつながる(現在は大阪府道158号が道筋をほぼ踏襲)。清滝峠を越えると、国道と部分的に合流しながら京都府木津川市で国道24号、奈良街道と合流している。行基みちは当初、現在の国道163号に沿って通っていたと考えられていたが、四條畷市教育委員会の調査で、新たに側溝付きの古道跡の一部が清滝第一トンネル付近で発見された。



家原寺

堺市西区

行基の誕生地。行基が建立した寺院の第一号だが、行基建立四十九院には含まれず特別扱いとなっている。



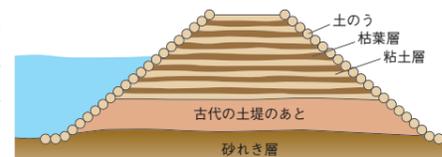
家原寺境内行基像

日本最古のダム式ため池を改修 狭山池

大阪狭山市 733年(天平5年)改築

古事記、日本書紀などに記載がある日本最古のダム式ため池。使用されていた木製樋管を年輪年代測定法で調べた結果、飛鳥時代616年の完成であることが確認されている。行基は当時としては斬新な築堤技術の敷葉工法を採用し、古代の堤跡の上にさらに土のうを並べ、土(粘土層)を盛り、広葉樹の葉を敷き詰め踏み固める圧密促進工法で、かさ上げ時のひび割れを防止し保水力を強化している。

現在の狭山池。行基の工事後も改修が繰り返された。



大阪府立狭山池博物館には、当時の堤体断面が移築保存されている。



万葉集を始めさまざまな和歌にも詠まれていた昆陽池。広大だ。

行基町二丁目

伊丹市内では行基町の看板が見られる。



近くにある昆陽寺の境内には「山鳥のほろほろとなく 声きけば 父かとぞ思ふ 母かとぞ思ふ」という行基の父・母への思いが伝わる歌碑がある。

洪水や水不足の事態に備えた用水池 昆陽池

兵庫県伊丹市



現在は公園化され、野鳥の楽園となっている昆陽池公園。733年(天平5年)、行基はここで複数のため池造営を人々に指導し、灌漑用水池として整備した。かつての昆陽一帯は洪水のたびに甚大な被害を発生させており、行基は米作普及のために野原を耕し、新しい田畑づくりを促し、洪水や水不足で困らないよう用水池として5つの池と3つの用水路を完成させた。昆陽池はその中でも最大で、当時は周囲が4kmにも及んでいた。現在は約4分の1の広さとなったが、その試みは日本の多目的治水ダムの先駆けだった。また、既に731年(天平3年)に昆陽寺を開創していた行基は、この昆陽池整備の際にも病氣や旅の困った人を受け入れる施設(院)を建て、親身になり世話をしたと伝えられている。